

令和6年度 泉大津市立図書館協議会

■第3回会議の議事概要

日 時：令和7年2月12日（水）午後2時30分～午後4時30分

場 所：小津中学校メディアセンター

出 席：嶋田会長、阿児委員、岡本委員、澤谷委員、高島委員、高橋委員、谷合委員
教育長、教育部長、教育政策課長、指導課長、生涯学習課長、都市づくり政策
課長、資産活用課長、小津中学校3年生（井上、北隅、長嶺）

公開の有無：公開

議 事

(1) 「キミと、よみドキっ！」評価会

議事概要

嶋田委員：今日は協議会2期目1年目最後の回である。前回より、これまでの泉大津市立図書館の活動が非常に充実した素晴らしいものであるということ、我々泉大津市立図書館協議会の委員も感じており、評価というとおこがましいが私たちから見て感じたことを市民の皆さんにお伝えできるような文書ができないかと議論してきて、委員の皆さんに賛同いただき文章が集まってきたところである。今日は、高橋校長からご覧になった泉大津市立図書館の様子や小津中学校の取り組みも併せて、冒頭お話しをいただきたい。

高橋委員：泉大津市立図書館協議会に関わり、市立図書館に何度も伺いながら、また学校としても図書館と連動して授業の中でビブリオバトルなど様々な指導を受けながら遂行してきた。中学生の読書離れもよく言われるが、新しい市立図書館ができたことで、そこに足を運ぶこどもも実際増えたと思っている。小津中学校のメディアセンターも図書館を兼ねているが、ここも新しくなり綺麗な環境だからこそ、こどもが利用して読書のみならず読書以外の活動も活発に行えるようになったと思っている。まずは綺麗なデザインや使いやすい配置など、様々な多機能が組み合わされていることで、読書活動自体もより進んでいくものだろうとすごく感じている。小津中学校の場合は読書活動もちろんだが、授業の中で「調べ学習」をしたり、こどもたちの様々な活動、例えば校則改定のルールメイキングの会議の場でもメディアセンターをよく利用している。あるいは学校の方針を作るコンパスデザイナーという生徒たちがいるが、その会議でもいつも利用している。他には授業の中で「共創の授業」といって、小津中学校では探究学習をととても進めているが、調べものや小グループで活動でも利用している。その中で、長嶺さんは「創作活動を未来に繋げる」という小説が好きな生徒が集まって小説を作るグループで、ここを拠点にして短編小説集などを作って

いる。教室に行くのがしんどい子の休憩の場としても使ったりしている。憩いの喫茶コーナーというカフェスペースを作りたいというプロジェクトが子どもたちの中にあり、一角には雑誌を置いたりこたつやぬいぐるみを置いたりして、憩えるスペースとしても活用している。このように単に本を読むだけでなく、いろんな活動ができる総合的なメディアが集結した場所ということで、図書館は学校の中核になり得る場所であると考えている。

嶋田委員：市立図書館から学校支援や連携はどのようになっているのか。

高橋委員：ID を共有していて、学校で借りた本と図書館で借りた本のどちらでも返却や検索ができるようになっており、これからますます活用が深まっていくと考えている。また中学校の場合は、国語の授業で読書を中心にしたような活動もあるので、そのときに図書館職員に指導に来ていただくことも進めている。

嶋田委員：今伺った意見も含め、図書館協議会委員の意見とまとめて一つの文書という形で市立図書館に返したい。

事務局より報告

「キミと、よみドキっ！」に基づく取り組みについて

- ①子どもが使いやすい市立図書館・学校図書館の整備
- ・学校図書館を使いたくなるよう、工夫した図書館にします

教育政策課長：本市の小・中学校については、全国的にもだが校舎の老朽化があるので、順次校舎の更新を進めている。実際の工事の進捗管理などは、資産活用課の力を借りながら進めているが、シーブラが出来る前、旧図書館は再任用職員の館長で、司書採用は会計年度任用職員の体制だったので、校舎の大規模改修や建て替えの総設計にあたっては専門的な知見を借りることもできずに設計を進めていた。シーブラが出来て、館長・副館長は府外から来ていただき、専門的な知見を活用して設計段階からシーブラと連携しながら、少しずつではあるが進めている状況である。

資産活用課長：資産活用課は市役所の建物を設計したり、建てたりしている課である。学校や教育委員会事務局の意見を伺い、それを形にしている。いろいろな意見を聞きながら皆さんが使いやすい、また高橋校長からも話があったように、多様な使われ方が必要だと考えている。従来の固定した使われ方ではなく、学校図書館ではなくメディアセンターという名称でもある。皆さんが卒業した後も図書館がどう使われていくかは変わっていくが、建物を建

て替えると何十年もそのままの形になるので、何十年も使うことができるような建物を皆さんの意見を聞いて形にしていきたいと考えている。

- 市立図書館、学校図書館にこどもがリラックスできる空間をつくります

事務局：グループラーニングエリアはみんなで勉強しながらホワイトボードを活用したり、その奥では年配の方が調べものをしたりと自由な空間になっている。また、ネイチャーブレイクという植物の貸出も行っているが、一番多く利用しているのは男子高校生で、多い子は3つ4つ自分の前に並べて勉強をし、西日本花き株式会社との交換ノートにも、「植物があったから勉強が捗った」と書いてくれた子もいた。学校ではどうだろうか？

高橋委員：メディアセンターの一角がカフェスペースになっており、床に座ったり、こたつやソファも用意されている。ぬいぐるみや雑誌もあり、飲み物の持ち込みもOKなスペースも設けている。

- 楽しく図書館を使えるよう、使い方指導を丁寧に行います

事務局：泉大津市立図書館では、まち探検など授業の中で、学校からいろいろな学年のこどもが図書館見学に来るので、資料の探し方や借り方・返し方などを毎回説明している。

高橋委員：学校では、学校図書館司書や図書館担当の先生に必要な応じて指導をお願いしている。

- 学校図書館で容易に資料を探せるよう、データ及び装備を整えます

事務局：全校に学校図書館司書がいるが、一人ではなかなか難しいこともあるので市立図書館から少し手伝いをさせていただいている。

指導課長：指導課では、全校に学校図書館司書を配置する予算と資料購入の予算、資料を排架するにあたって必要な消耗品を購入する予算を取っている。整備というところでは、図書館司書への研修などを行っている。

②こどもが読みたくなる資料の収集及び提供

- こどものニーズを常に拾い上げる工夫を行います

高橋委員：こどもが書いてきたリクエスト用紙の資料を購入するようにしている。本校では有名な人気漫画を全巻揃えるなど、漫画も充実させている。漫画は今では日本の文化となっていて、海外からの短期留学生も漫画にすごく興味を示して、ポルトガルの子たちは食い入るように読んでいた。

- ・魅力的に感じる資料、興味を示す内容の資料を収集及び提供します

事務局：こども育成課からのコメントで「こどもたちの不思議におもう気持ちや知りたいと思う気持ちを満たすために資料となる絵本や図鑑などを排架したり、活動の中で資料として提供している」といただいている。

- ・資料の鮮度を保つため適切に廃棄作業を行い、基準を満たすよう収集します

指導課長：シーブラの司書指導の下、学校図書館司書が大体 10 年から 20 年で廃棄をして新しい資料を入れるようにしている。

③こどもが情報の選択をできるようになる取り組み

- ・複数の文字情報や画像情報をくらべられるよう、様々な情報ツール及び情報を取得できる環境を準備します

事務局：市立図書館では講座を聞いた後、疑問に思ったことをその場で調べて、まとめる指導を年に何回か行っており、こどもたちが疑問に思ったことを様々なツールから情報収集できるという指導を夏休み中心に行っている。

高橋委員：こどもは一人一台 iPad を持って情報収集をしており、メディアセンターもフリーWi-Fi なので、学校中どこでも情報を得られるよう運用している。

- ・多角的に情報を見て考えられるようディベート活動を推進します

事務局：図書館では今年度の夏休みに、学校の先生と一般の方を対象としたディベートの指導ができるような講座を開催した。来年度はぜひ児童・生徒の皆さんにチャレンジしていただいて、課題解決にディベートが使われるといい。

④こどもが読むことに触れられる場所の整備

- ・市内の様々な場所で読むことに触れられるようまちぐるみ図書館を整備します

生涯学習課長：まちぐるみ図書館ということで書いてあるとおり、まち全体を図書館に見立てており、市内のいろいろな場所で本に出会える環境を、ということで、令和 5 年度は学校図書館の地域開放やお店、公園、街角などで本を見られる場所を作り、パンフレットにして作成をした。そのときは 17 件のお店などを掲載したが、そこから今年度はデジタルマップで更新する形で、更に親子ひろばなどでも本に触れられる環境という形で、現在 22 件で本を見られるようになってきている。これは、市民の活動という形でたくさんの方に関わっていただき、高島委員を中心に行っていただいている。2 月 16 日にもまちぐるみ図書館の講演会、本と繋ぐ人とまちという形で、まちライブラリーの提唱者である磯井純充氏に講演に来ていただき、今後もそのような形で、市内の至る所で本に気軽に触れていただけるように増やしていけたらと考えている。市民の協力もあって進めていくような状況である。

都市づくり政策課長：都市づくり政策課は公園の整備や管理などを行っているが、令和 5 年にオープンしたシーパスパークのワークショップでは、木陰で本を読めたら、という意見が市民からあった。樹木はこれから育っていくので、現在はまだ木陰が間に合っていないが、管理棟に本を置いている。これを持ち出して、外の公園やパークセンターで読んでいただくという活動になっており、親子連れなど、こどもに読み聞かせるなど活用いただいている。

事務局：こども育成課からは「就学前施設で絵本を自由にとって読めるように絵本コーナーを設置したり、季節の読み物を展示したりして絵本を身近に感じられるようにしている」とコメントをいただいている。

⑤こどもが読みやすい多様な資料の収集および提供

・乳幼児と保護者の言語コミュニケーションのため、布の絵本及び布のおもちゃを収集及び提供します。

事務局：現在、市立図書館では布の絵本、布のおもちゃを 16 点作成して、館内で自由に使うことができるようにしている。今後もう少し数が増えていけば、幼保・こども園・学校・検診会場などに持ち込めたらいいと考えている。

・読むことへのバリアをなくすため、やさしい日本語資料・多言語資料・デジタル資料・LLブック・UD 絵本・点字つき絵本・大活字本などを収集及び提供します

指導課長：先ほど話した資料の購入の予算で、他言語の資料という形で購入して、多言語コーナーを作っている。最近多いのは英語の資料を購入して、今年度から 7 校の小・中学校に配置している常駐の ALT が読み聞かせで英語の資料を使っている。

事務局：読むことのバリアをなくすという視点で、やさしい日本語資料を市立図書館でたくさん収集しようとなったのは、「キミと、よみドキっ！」のワークショップの中で、「なかなか漢字を読むのが難しい」、「読みたいが分厚いとなかなか読みづらい」、「文章が長いと読みづらい」という意見があったので、やさしい日本語資料を揃えることで日本語が母国語ではない方も気軽に楽しめるのではないかと考え、最初にやさしい日本語資料を入れている。

⑥こどもが情報をアウトプットできる取り組み

収集した資料を文章や図、グラフ、イラスト等でまとめる指導を行い、発表できる場をつくれます

事務局：先ほど話したが、市立図書館では調べる学習のアウトプットである、自分で調べてまとめ、それを発表する場を作っている。今年度は市立図書館から学校へ伺い、3校7授業（7回）で調べる・まとめるの授業を行っている。

高橋委員：探究学習の「共創の授業」でメディアセンターをよく使って資料収集をしている。その中で社会あるいは地域、保護者に向かって発表する場を作っており、例えば長嶺さんの作っている小説もプリントし、配布をして読んでもらうなどアウトプットの場を必ず設けている。

- ・多角的に情報を見て考えることができるよう、ディベート活動を推進します

事務局：先ほどと重複するが、先生や一般の方に向けたディベートの指導ができる講座を市立図書館のオープンセミナースペースで開催をしている。

⑦こどもが読むことをサポートする読書補助器具の設置

- ・ディスレクシアや視覚障害などの人の読書補助器具であるリーディングトラッカーやリーディングルーペを、こどもが読むことに触れられる場所に設置することで、読むことに集中ができにくいこどものサポートを行います

事務局：今年度は小・中学校 11 校に 33 個をまちぐるみ図書館スタート時の 17 ヶ所に、合計 50 個を設置依頼している。中学生は見たことがありますか？

長嶺：リーディングルーペが設置してあるのを見たことがある。

- ・集中力アップのため[ちょい寝]できる環境を整えます

事務局：食後 12～15 時までの間に 15 分間仮眠を取ることは午後のパフォーマンス向上に繋がる、という放送を入れたうえで枕の貸出を行っています。多くはないが、開始してから 1 月末までで 32 件の利用があった。大体、高校生の利用が多く、15 分で返してくれている。

高橋委員：学校では特にやっていないが、役所で行われる会議のときに私が使いたい。

事務局：余談だが、熊本県宇土市にある中高一貫校は給食の後に 15 分間仮眠を行っている。

長嶺・北隅・井上：羨ましい。寝たい。

阿児委員：ちょい寝は有りかもよ、学校でディベートをしてみるといいのではないかな。

事務局：ただ寝ていると周りの視線もあるので「リチャージ中」という札を立てるようにしている。

⑧子どもが読むことをサポートする取り組み

- ・読むことが楽しくなるきっかけづくりの読書活動を行います

事務局：市立図書館では木工作やボードゲーム作りなど、「作る」というキーワードのものに調べるための本をプラスしている。例えば、木工作であれば環境の勉強と一緒にしてもらうことで、読むことがあまり好きではない子どもにも気軽に本に触れてもらえるような場を作っている。また、図書館では長く「読書会」を行っていたが、「読書会」というと読書をしなければいけない、というイメージが名称として強いので、市立図書館では「ブックコミ（ブックコミュニケーション）」というイベントにして、本を真ん中に好きなことを喋る会をしている。たまに中学生も参加してくれるが、中学生が紹介した本を大人が喜んで借りていくなど盛り上がっている。

井上：ビブリオバトルといって、一人一人がそれぞれ自分で本を選んで、それをクラスのメンバーの前で発表することが国語の授業で行われている。例えば、ある一人の本が面白いと思ったらすぐさま図書館に行って、紹介されていた本を借りるということをやっているのだ、実際に他の人が紹介していた本を借りるというシステムが学校の中である。

長嶺：1 位の方は全学年の前で発表するなどあるが、その際に紹介した本を「面白そう」とつぶやいた子もいるので、読書活動に繋がっていると思う。3 年生は全員、ビブリオバトル

を聞く側だけでなく作成する側もやったが、一つの本をただ読むだけではなく、この本のどこがいいのか、どこを読んで欲しいのか、どこを深めてほしいのかを自分なりに模索して人に伝えないといけないので、より作品への理解が深まると思うし、自分の中の文学的な知識を培うすごくいいきっかけや取り組みにもなっているので、またやりたい。もう卒業してしまうがまたやりたい。

⑨こどもが読むことをサポートする大人の増加

- 学校図書館の地域開放を地域の大人とともに増やし、市立図書館を地域の拠点とします

生涯学習課長：まちぐるみ図書館も徐々に増えてきており、今後も拡充をしていけるのではないかと考えている。

- まちぐるみ図書館の活動をサポートする大人を増やします

事務局：先ほども話したが、現在 22 ヶ所になっている。講演会をきっかけに増えるのではないかと。

- 市立図書館にこどもの読書活動を指導できる司書を配置します

事務局：市立図書館にこどもの読書活動を指導できる司書を配置します、と書いている。現在図書館司書の資格を持っている者は 11 名いるが、図書館員であればきちんと指導ができるのではないかと思い、これを書いた後に数字のところは改善しないといけないのではないかと反省している。

- 学校図書館にこどもの読書活動を指導できる司書を配置します

指導課長：今年度は 11 校全校に配置をしたが、内訳がパートタイム 3 名、時間額 8 名（1 時間単位）で配置している。パートタイムの学校図書館司書のほうが見ている時間が長くなるので、来年度はパートタイムを 1 名増やし、パートタイム 4 名と時間額 7 名という形で少しずつ改善していくことができるといい。

- 市立図書館に学校図書館や授業への助言ができる司書を配置します

事務局：市立図書館の職員が学校に出向いて授業を行っている。

- 市立図書館長はこどもの読書活動推進の視点を持った図書館運営を行うとともに学校支

援サービスを強化し学校図書館をサポートします

事務局：授業用の資料支援として、先生にワンアクションで図書館の本を使っただけのよう申請書を配布している。し点を入れてメールかFAXで送信いただくだけで、授業の内容に沿った資料を図書館から提供している。また、学校図書館の運営相談に伺っているが、運営相談と授業支援を併せて昨年度は1年間で200件程度だが、今年度は1月までで既に300件を超えているので、授業でかなり活用いただいている。

- ・学校図書館長である学校長はこどもの読書活動推進の視点で学校図書館運営を行うとともに学校支援サービスを教職員に周知することや図書館協議会委員として活動することで市立図書館に関わります。また、地域の大人がこどもの読書活動に関わることができるようサポートを行います。

高橋委員：どの学校も図書館活動を大切に思って活動している。

事務局：昨年までは、学校によって市立図書館のサービスを使っただけの件数の差があったが、教育長を始め指導課からも話をしていただき、全校から依頼が来るようになった。情報を先生が知っていれば、たくさん使われるのではないかと考えている。

⑩こどもが読むことをサポートする人材育成

- ・読むことの多様性をこどもに伝える人材育成を行います

事務局：障がい福祉課より「障害児通所サービス事業所を中心とする障害児の支援機関に対して読書バリアフリー法の啓発を進め、日々の支援の一環として多様な読書機会が提供できるように行っている」とコメントをいただいている。

- ・学校での読み聞かせをサポートする人材育成を行います

事務局：市立図書館では、学校への訪問おはなし会のサポーター養成講座を行い、現在3名の方に登録いただいているが、まだ学校からの依頼がないので待機していただいている状態である。

指導課長：コミュニティスクール関連でみらい応援隊の方々が読み聞かせをしている学校もあり、また学校図書館司書による読み聞かせやALTが英語での読み聞かせを行うなど、多様な人たちが行っている。そのような人材が学校にいることを学校長にも伝えている。

- ・バリアフリー資料の製作をサポートする人材育成を行います

事務局：障がい福祉課より「大阪府が実施する点訳奉仕員養成講座や朗読奉仕員養成講座の周知を広め、人材の発掘・育成に向けた支援を行います」とコメントをいただいている。市立図書館では布の絵本作成サポーターを養成し、昨年度は 2 名しかいなかったが今年度は 12 名に増え、たくさんの布の絵本を作っていただいている。

- ・司書、教職員、地域の方、それぞれがバリアフリーの視点で必要とする研修を行います

事務局：障がい福祉課より「地域からの要請に応じ市の出前授業「障害福祉を理解しよう」を実施し、地域に向けた研修を実施します」とコメントをいただいている。市立図書館では、先ほどもお話しした布の絵本作成サポーター養成講座のときに関係の法律や読書困難な状況というのを、実際どのようなことが困難なのかを市民に知ってもらえるような講座を行っている。また職員研修で、障がい福祉課の職員による研修も行ってもらっている。

指導課長：学校図書館司書向けとして、今年度は 4 回シーブラの協力を得ながら研修を行っている。その中で先ほどの話にもあったが、リーディングトラッカーであれば誠風中学校区に勤務している司書が詳しいので、誠風中学校区では小中一貫の関連で取り組んでいる。良い取り組みとして研修の中で周知して広まっていくといい。

事務局より「キミと、よみドキっ！」における数値目標およびアンケートについて説明

事務局：アンケートでは、赤色が「読む機会が増えた」、「漢字や新しい言葉を覚えることができた」というプラスの意見、青色は「そうではない」というマイナスの意見だが、ほとんどが赤色である。図書館を使っている人たちからのアンケートなのでほとんど赤色だが、唯一中学生だけが「読む機会が増えた」という回答が少なく、「増えていない」が多かった。聞き取りをしたところ、もともと読んでいたという意見であり、もともと読んでいないことに聞くと違いがあったのではないかと反省点である。保護者からは高校生の息子さんがシーブラが開館したことでよく図書館を利用するようになり、本を読むようになった、という話を伺うことができています。館内には「キミと、よみドキっ！」を拡大し、見たことのあるシーンにシールを貼ってもらう調査を実施した。これは協議会で提案いただいた方法である。「キミと、よみドキっ！」を知らない方も多く、これを貼ることで知ってもらいきっかけになり、市民に取り組みが伝わっているかをダイレクトに聞くことができたので良い機会をいただくことができた。

嶋田委員：去年の 3 月にできたばかりの取り組みだが、感じたことを聞かせてほしい。

北隅：私はどちらかというと本を読む機会が少なかった。友達に誘われてシーブラに行ったりして一番驚いたのは、図書館は辞書や小難しい本、文学小説がたくさん置いてある場所というイメージだったが、シーブラは雑誌なども豊富に置いてある。頭を使って、休憩するのに雑誌で癒されることなどもできて、実際に友達とシーブラに行ったときに、そのように利用している。やはり種類が豊富なことや、わかりやすいところに置かれているのはいいと思うし。また、先ほど聞いた 15 分間の仮眠にもものすごく惹かれた。次に行くときは利用したい。

長嶺：旧図書館の頃から泉大津市立図書館を利用していた。数年前にシーブラができて、とても綺麗になっていて、前の図書館は暗くて自習するスペースも全然無く、机も少なかった。行ってはいたが、快適かと聞かれると「うーん…」と思うところもあった。シーブラは大改修されて、もっと行きやすい環境にもなったし、「キミと、よみドキッ！」という取り組みで、電車に乗っていても「シーブラにいこう」という声を耳にするぐらい、泉大津市外の人にも身近な場所になりつつあるのを感じるし、眠れるスペースや雑誌や漫画が置いてある環境が、いい図書館として進化していていると思った。自分も試験前などで自習をしに行っているが、そういうときでも快適に限られたとても静かなスペースがあり、そこで自分のしたい勉強をちゃんとできるのは、前の図書館では全然考えられなかったのですごくありがたいし、これからも続いてほしい活動だと思った。

井上：自分も旧図書館の頃から使っているが、シーブラになって何が変わったか、と言われると、やっぱり自習に行くのにめっちゃくちゃ便利になって、旧図書館よりもオープンになって、より行きやすくなったと感じる。特に本の配置なども変わっていて、図書館に行くと全体を見回っているが、中央に毎月のおすすめ本が配置されているのを見て、「これ面白そうやな！」と思うのがたまに 20 冊ぐらいあってやばい。おすすめの本が整理しておかれているので、自分のロマンや興味を感じるものがある印象である。

長嶺：泉大津高校の生徒が作ったポップが展示されていて、その取り組みもすごくいいと思っている。実は中学 1 年生の頃に泉大津市立図書館ポップコンテスト（JC 主催）に参加したことがある。そのときに自分の紹介する本を深掘りできたこともあるので、図書館に訪れた大人やこどもに自分の好きな本を紹介できる取り組みや、そのように生徒が図書館の活動に関われることがいいと感じた。

阿児委員：やはり、みんなで話し合いができる場が 1 年に 1 回でもあることが大事だと感じていた。市役所の人が考えていることなど、顔が見える関係がいい。館長が取り組んでいることを、皆さんに伝える場所やツールを交換できる、この場がすごいと感じている。また、

今日の評価を一つ一つ聞きながら思ったことだが、「こどもが情報をアウトプットできる取り組み」のところで、今はネットがあるので日本全国、世界にいきなりアウトプットできる。でも、シープラに行けば、まず隣の中学や高校など、身近な近くの人たちとの交流をもっと増やせる。このような身近な場所へのアウトプットが多くなるといいのではないか。また先ほど、学校を卒業するとビブリオバトルができなくなると話していたが、高校生になっても大人になってもできる。学校図書館は卒業すると終わりかもしれないが、市立図書館であれば終わりがなく繋がってずっと続く。小学校から中学校、中学校から高校、高校から社会人、大人になって暮らしていくまで続けることができるサポート。市立図書館がそのような接続の場所になるところなのではないか。今回の「キミと、よみドキっ！」はこどもの読書活動推進計画だが、大人の読書活動にどう繋げていくかも視野に入ってくると面白いのではないか。

岡本委員：ボリュームはあるが、これだけ具体的に書かれているものはよかった、と改めて感じている。こういった計画は得てして大きな話だけ書かれていて、評価するという作業をするときに、どうしても取れるものが行政の計画に多いので、かなり具体的に記されているのは意味がある。しかし、具体的に記述すればするほど、書かれていないことをやりづらくなる側面があるので、実際に各部署でいろいろと実行していくプロセスで、実はこちらのほうが大事ではないか、という気付きがあって、困ったことや対応したことがあれば伺いたい。それ以外に関しては具体的な目標を定めて、このように記述的に書くのは続けてみていいのではないか。この課題は具体性が高いが故に、どうしても小回りが利かなくなり得ることだと思うが、具体性が無いと正直意味がなくなってしまうのが一番気になるところである。同時に評価の仕方としては、いくつか数値目標、数字で評価する部分があるかと思う。数字で評価することを量的評価、量ではない観点で評価をすることを質的評価というが、このように文章で書いたものは質的評価になりやすく、そしてこれからの行政評価においても、もう少し質的評価を取り入れた方がよい。実際、世界的潮流と言ってよい。量的評価にこだわっているのは日本だけで、世界的には何でも効果測定をしすぎである。正直、効果測定をすることが目的化していて、反って悪い結果をもたらしているのではないかと行政的には見られているので、この方式自体は非常にいい。言葉は悪いかもしれないが、実験的なやり方として非常に意味があるので、数年で足を止めず、5年から10年やってみて、そこで図書館の在り方を含めて評価をするといいのではないか。

嶋田委員：2019年に「測りすぎ」というジェリー・ミラーが書いた本が出版され、測定することに一生懸命になりすぎて結局失敗しているといった内容だったのを思い出した。

澤谷委員：私も別の市立図書館で勤務しているが、普段なかなか中学生、小学生、高校生から直接話を聞くことがないので、今日出席している市役所の方もこのような機会を持てる

のはありがたいのではない。いろいろな評価の話が出たが、直接こどもたちの生の声を聞けるのは、校長先生も自校での取り組みを一生懸命伝えて学校の予算を取っていると思うが、それよりもっと効果的なのではないかと感じた。こどもたちと役所を引き合わせるような場を図書館が繋げてできたのは、とても意味があることだと感じる。先ほど生徒たちから、卒業したらビブリオバトルができないという話が出たが、「キミと、よみドキっ！」の「こどもが使いやすい市立図書館、学校図書館整備」のところは、図書館は市民にとって使いやすい場なので、中学校を卒業してからはこどもたちがやりたいことがあれば市立図書館長に伝えたい。図書館が用意したものではなく、自分たちが作っていくのはすごくいいし、自分たちのやりたいことができると思うので市立図書館を使うといい。評価のところでは、やはり質の評価はすごく難しいと感じる。いくらこういうことがいい、となっても実感をなかなか持てないが、これだけの取り組みを並べて細かく評価している点は前例にもなるし、今後どこかの図書館のモデルにもなっていけるのではないかと感じる。ずっと続けていってほしい。

高島委員：今年度の春に「キミと、よみドキっ！」を皆さんと作って、1年余りでこれだけ具体的な内容が出て、実際にどのように市が動いているのかなどを実践していてすごくよかったと感じている。アンケートに関しては、初めに館長が言われたように図書館を利用している人たちの意見が主なので、必ずしも市民全体の意見として反映されているわけではないが、このように図書館を利用している人たちが肯定的な意見を寄せてくれていることは評価していいことであり、今後はこの施策がずっと続くと考えられるので、できれば無作為に学校や企業、町内会など大人を対象に同じようにアンケートを取ってもらい、どのような結果になるのかを見てみたい。また、私が関わっているまちぐるみ図書館に関しては、マップを作った2023年度にまちぐるみ図書館に関わっている人たちと初めて会い、年に何度か継続して何度かミーティングをしている。それまで個々に活動していた団体と顔を合わせて話をすることによって横の繋がりができ、市民団体に活動している方が他の地域開放図書室に行って合同でイベントをやるなどの繋がりができ、まちぐるみ図書館が広がることによって泉大津市全体の読書環境が整い、ますます活発になっていくといい。

高橋委員：つい1時間ぐらい前に無茶振りですぐに生徒に声をかけたが、それでもこのように来てくれて、きちんと喋れるこどもに育っていて嬉しい。普段から本に親しんで、自分事として捉えることができるこどもたちなのでよかった。メディアセンターはデザインも綺麗で照明なども工夫されていて、市の協力があってこそ、である。いわゆる一般的な学校の図書室であれば地味な感じで終わってしまうが、このようにデザイン化されて綺麗なところで気持ちよくという環境が与える影響は大きいと考えている。こういうところだからこそ行きたいと感じ、行って気持ちよく過ごせる、ゆるゆるできる。こういった面で言えば、学校図書館はこれから大規模改修が進んでいくので設計でも、綺麗な環境を図書室中心に

いろいろなところで作っていったらと考えている。メディアセンターと同じようなコンセプトで学校の中の様々な部屋や場所を改造・改良・改装しているところなので、後でお時間があれば見ていただきたい。

嶋田委員：このメディアセンターに入ったときに感動したが、他校への波及はあるのか。

教育長：他校への波及の前に、まず地域交流ゾーンという形で大規模改修の時に、公民館など様々な教育施設が老朽化しているなかでどうしていくかを皆さんで考えていただき、学校施設の有効活用ということで考えた。私も9年間小津中学校で勤務して学校のことはよくわかっていたので、小津中学校の大規模改修のときに建物の活かし方などを設計段階で校長と話したり、設計の方にもお願いをした。今、約160の市民団体が活動しているが、その状況をどういう形で有効活用させていけるかも、生涯学習課が中心になって苦労しながら進めた。そうするといくつかの団体が小津中学校の地域交流ゾーンを使うようになってきて、すごく綺麗で使い勝手もいいという話を聞く。少し話は逸れるが、山崎エマ監督の「小学校～それは小さな社会～」というドキュメンタリー短編映画があるので、ぜひ見ていただきたい。小学校のごくごく普通の毎日にある日常を約4,000時間撮影した映画である。普通に小学校の先生はすごいと感じる映画で、涙が出てくる。教育の中で、普遍的で大事なものが日本のアイデンティティを作っているのではないか。山崎エマ監督はダブルで、もう一人のインタビュアーもダブルである。私も海外に8年間住んでいたのでよくわかるが、日本の義務教育の教科書はおそらく世界一である。OECDでは、義務教育は日本よりシンガポールが上だと言われているが抽出の仕方で違うので、私は日本の教育は世界でトップだと考える。小津中学校の子どもたちがここで胸を張って喋っている様子や、朝10時に図書館の開館を待って並んでいるのを見て、泉大津も捨てたものではないと感じる。泉大津で小さな頃から育って、図書館や公民館で中学生や高校生が勉強している姿を見たことがない。勉強したくてもできない、ちょっと喋ると他の来館者に怒られるという状況であった環境の中で、図書館に行く子どもがたくさんいるというのは、これから泉大津の子どもたちには期待できると感じている。

谷合委員：私は労働関係の専門図書館に勤めていて、利用者は大人である。絵本や小説も置いてない。専門書や学術書、博物館に行くような資料を置いていところである。そこで働いている私にとって、一番の先生は利用者である。専門家ばかりが来るころなので、個別の問題については私たち図書館員より弁護士や大学の研究者、社会保険労務士など土業の方がよく知っているのですごく勉強になるし、いろいろとこちらから質問している。今日、この協議会を見ていて、やはり利用者こそが私たちの先生だと改めて実感した。図書館を設置して運営している人たち、それをバックで支えて市全体で作ってこうとしている行政の人たち、私たち外部の委員だが、それを外から見ている実際に利用する人たち。このよう

に揃って、話を聞かせてもらって喋ることができるのは最高に幸せなことである。生徒の皆さんもいきなり当てられたかもしれないが、すごくいい機会を与えられている。教育長にお訊ねしたいが、他の学校図書館はどうなっているのか？

教育長：小学校は前に進んでいるが、中学校は小津中学校以外の2校はまだまだである。現在、全11校の学校図書館のあるうち、資料の整備連携ができたのは4校で、あと7校が残っている。遅れている言い訳ではないが、とにかく校舎が古く、図書館も旧態依然のスクエアスペースのままという現状なので、大規模改修のたびに前に進んでいく前例を小津中学校が作ってくれた。長い目で見ればよりよいものに発展していくと考えている。

谷合委員：ここがモデルケースと思うが、財源は無尽蔵ではないので当然集中的にどこに使うかという問題はある。読書活動推進のために皆さんがこれだけすぐに動くのはすごいことである。これだけすごい図書室があって、シーブラもあるのは非常に幸せなことである。館長は、ありきたりのものではなく利用者の声を聞きたいという思いから、図書館に来ている本嫌いのこどもたちの意見を聞いて「キミと、よみドキっ！」を作った。これはオリジナルなので全国にあるとは思わないでほしい。利用者から取ったアンケートも貼ってあるが、数字だけを見ていけば、これが右肩上がりにならないと我慢ならないと思う人たちが出てくるので危険だと感じている。質という測れないものを測るためにはどうしたらいいのか皆で知恵を出し合うが、中学生のほうがずっと頭が柔らかいし何でも知っている。利用者が先生だという気持ちを忘れずにいたい。

嶋田委員：今日、各課の発表や説明を聞いたが、まさに質的であり、ストーリーだと感じた。ありがちなのは、文書になると型どおりで全然心に入ってこない。でも今日はそれぞれの所属課の責任者である課長が、ご自分の所管の担当政策に絡めてご自分の言葉で話されたことがあったから感動した。質問だが、「キミと、よみドキっ！」の課題や取り組みについて各課への要請があったと思うが、課の雰囲気や課員の皆さんに変化があったのであればエピソードを伺いたい。

教育部長：まず中学生の話聞いて、シーブラの整備にも関わった者として涙が出そうになるくらい嬉しかった。シーブラができて、河瀬館長に来ていただき、こういった取り組みについてハード系、ソフト系を各課長に話してもらったが、一番大きいのは流れができたことである。今までは全く流れがなかったが、市全体で読書環境を向上させる流れができたというのは、一番大きなことと考えている。他の課でも読書環境を上げるために、必要な物や事を上げるのが普通というより当たり前の流れができてるのが大きい。

岡本委員：「キミと、よみドキっ！」で具体的に質的に記述されているが故に、書いてない

ことだがこれをやるべきだ、という気付きがあってもできなかったことがあれば聞きたい。

事務局：書いてないからやらない、のではなく、書いてなくても書いてあることに当てはめて行う、という方向で図書館は動いている。

岡本委員：民間の事業者として私が自治体に打診や提案をする際に、今年度計画に入っていないから来年度に考えるとほぼ100%返ってくる。計画行政的に決して間違いではない一方で、これでいいのかとは感じる。実際に国で教育カリキュラムの改訂をしていくなかで、生成AIをどう扱うか。今のペースでカリキュラム改訂をしていて本当に大丈夫なのかは、中教審等で激論になっている。フレキシビリティを持たせるというやり方は常に必要で、そこは特に気になったところである。ただ、今の話を聞いて納得したのは、文章で書いてあるので解釈の幅を持たせられる。大体まずいケースは、やることをただ箇条書きで列記するスタイルにすると、書いていないからやらない、名目を付けにくい。それは行政的にはよくわかる。その名目で、その科目に対して予算を充てている場合、それ以外のことに對して予算を流用させていいかと言えば、正直よくはない。でもこの文章の書き方であれば、そもそもの目的はどこにあるのか。大意としては、行政的な意図としては予算流用ではなく、より行政における裁量を拡大して採用したというように運用できていると感じた。これは今後もとにかくやってみて、書かれていないからこそ、顕在化しない課題が出てきたときにどうしていくかというのはとても大事である。

生涯学習課長：計画は大体そのように作られているが、「キミと、よみドキッ！」は他の計画と比べると大きく幅を持たせているので、逆に幅広く考えられるほうではないか。

教育長：教育委員会としては、今言われている以上にお金の使い方が難しい。私も現場上がりで行政経験がないので、それは非常に腹立たしいときがある。でもそのための準備をしてもらうのに、今こういうことのために予算を取りにしている、ということを校長会で言うようにしている。だから、もし取れたらそれはやらしてもらわなければいけないという話で、校長も次年度の学校経営にそれを含めるような流れにしている。また、教育委員会の最上位計画は「教育振興基本計画」だが、大体6~7mmぐらいの分厚い冊子になっていて誰も読まないの、A4裏表にした。春に出来上がる予定で、その中に図書館のこともちゃんとわかるようにしている。みんなに配って、読んでもらいたい。私はトライアンドエラーだと思っているので、課長は苦労していると思う。先ほど生成AIの話も出たが、市役所はGrafferというAIを使っていて、その200アカウント分の予算を取りに行った。まず学校の先生に使ってもらって、次に子どもたちに、というようにステップを踏んでいかなないとわからない。文科省の決まり事を待っていたら、それこそとんでもなく遅れてしまう。そういった動きをしていることも知っておいてほしい。

谷合委員：いろいろな所との連携の中で書店は入っているか。

事務局：入っていない。

谷合委員：以前にも言ったが、書店との連携は大事だと考える。泉大津には調べたら書店が6店舗ある。産業振興という点でも、図書館だけではなく書店と共に隆盛しなければ、読書環境は充実していかない。そのあたりは課が違うのかもしれないが、同じ本の話をしているのになぜ課が違うのかと単純に思ってしまう。図書館で本を借りるのも大事だし、図書館にしかない本もあるが、その一方で自分の手元に本があるのはとても嬉しい。予算の話もあるので難しいとは思いますが、各家庭に本が行き渡ればいいのにと感じる。

嶋田委員：出版業界にも、産業としての書店を支えようとする動きも出てきて、図書館が絡んできたときには読者を増やす、という視点でいいという見方をする人もいるようだが、今は実証的に図書館で本を買えるような仕組みを作ろうというのが少しずつ出てきている。何でもネットで買うのではなく、ふらっと書店に行ったときに自分で貯めたお小遣いで本が買える環境があるか無いかはとても大きいと考える。そういう意味では、公共図書館として手伝えることも考えていかなければならないのかと感じた。

生涯学習課長：昨年、生涯学習課の事業で市内の子どもたちに本を読んでもらえるようにという形で、物価高騰臨時交付金で小学生以下のこどもに5000円、中学生以上18歳以下のこどもに1万円の図書カードの配布事業を行なった。

岡本委員：今の話はすごく慎重である必要がある。特定産業に対する誘導になりかねないので、そこは慎重にならないといけない。それよりは手を伸ばせば届く環境を作ることが重要である。敢えて言えば、書店が潰れたところで出版が減じるわけではない。魚屋が潰れて、魚が売られなくなったか。地域の八百屋が消えて、野菜が買えなくなったか。そんなことはない。そこはやはり、小売り形態のビジネスそのものが社会に適合しなくなってきている現実を、冷静に見て捉えたほうがいい。その前提で文化パスのような仕組みを導入していくのが現実的ではないか。これまでの協議会の議論で何度も出ているが、泉大津市のメリットを最大限に活かす機会だと考える。本市の場合はとにかく規模が小さい。市域の規模がかなり小さい、かなり日本でもレアな規模の自治体である。だからこそ政策的に思い切った手を比較的打ちやすい。やはりこれが東西四方に100キロ規模の大都市になると、そのようなことは絶対できない。この中でうまく使えるような仕組みを作ることと、大阪という府内に存在している明らかな優位性があるのでそこをうまく活かせるか。例えば、難波に出て美術館に行けるなど、未成年であっても比較的自分で自由にできることに目的特化したような

パスポートを作る、などに発展させていくのが一番いい。その効果を持つのは、その恩恵を預かった若者たちが市外に出て暮らした瞬間に、とてつもない投資を自分たちにされていたことに気付ける。それは、恐らく成人式で帰って来た時などに、確実にふるさとに対して居住しよう、帰ってこようというかなり強いインセンティブを与える。そこは最終的に、Uターン政策までを見据えながら投資をするとよいのではないか。単体で見るとやはりコストが、という目線になると思うが、U・Iターン政策に自治体は無尽蔵に予算を注ぎ込んでいる状況があるので、そこに政策的な効果を考えてときに、実はこういうやり方のほうが確実にかなり角度の高い成果に繋がるのではないか。

澤谷委員：少し話が逸れるかもしれないが、教育長が言われていた「泉大津も捨てたもんじゃない」という言葉を聞くのは子どもたちにとってすごく訴えかけられる、というか、そこでシビックプライドが培われていくのではないかと感じた。実際に、自分が体験していることについて、それを大人が考えて、行政の側もちゃんと対応してくれているからだとということが分かって、やっぱり「良いことなんだ」とここで実感している。こういう子どもたちを作っていくことが、岡本委員も言われたように、大学などで市外に出て行って、また戻ってきてここに住んで、自分の子どももこの中学校に通わせたい、などに繋がっていくと思うので、一つの材料として図書館や学校図書館がそのように使われていくのが理想だと、今日の話聞いていてすごく感じた。子どもたちも目をキラキラさせて、今日参加してくれたのもそういうことを分かっているか、いい所をアピールしてくれたのですごくよかった。きっとこういう機会は将来に繋がるのだろう。

谷合委員：高橋校長の人選が素晴らしい。打てば響くような子どもたちを選んでくれたのもあるが、こういう子どもたちが核になって、周りをもっと広げていってくれるのだろう。

高橋委員：実際、小津中学校を象徴するような子どもたちである。いろいろな経験も活動の場も踏んできた子どもたちなので、こちらの求めることもわかり、自分たちのなりたい姿もしっかり想像しているなかで、中学校生活を満喫している。学校も大好きであり、市ももちろん大好きで、本気で核になれる子どもたちである。

阿児委員：今日の話で、電車の中で「シーブラ行こう」という声を聞いていることをすごく誇らしく語っていた。これは泉大津にとってすごく大事なことで、自分たちが享受しているだけでなく、他の人とも共有できている。「私たちのシーブラ」が、と独り占めしないという意味で、「すごくいいからみんなにも使ってほしい」、と言っていたのがすごく印象的であったので、各課の皆さんは、そのように市民が他の地域の方々にとっても自分たちの市を語れる、住んでいていいでしょ、という関係性をもっと大事にしてもいいのではないか。そうすると、澤谷委員も言われるようにシビックプライドの醸成に繋がり、具体的な姿として見

えてきている。それに関連して、私は東京の国立博物館で勤務しているが、博物館で課題となっているのは、博物館を知っているが来たことがない人がすごく多いことである。誰でも来ていいのに意外と誰も来ない、という課題があり、シーブラも来館者調査をしているが、やはり一方で非来館者調査も大事である。泉大津の非来館者はもちろんだが、泉大津で働く人や近隣市町村の方々も来館者候補として上がっているはずなので、非来館者調査を今後考えているのであれば、そこも視野に入れるほうがいい。電車の中や駅で聞いたりすれば「全然違うところに住んでいるが、シーブラに行きたかった」などの声も拾い上げられるので、泉大津のイメージが従来といろいろ変わってくるのではないかと。

嶋田委員：この政策の持続可能性といったとき、図書館長を始め、人員の持続的な立場や役所の人事異動の中で最適化を図っていくが、今日話にあったような方の意欲や姿勢を含め人事異動があってもぜひ人材を引き継がれてほしい。泉大津にこのように政策ができて、中学生の姿と言葉を聞いて生々しく感じた。日本の自治体でこういうことができるのか、というような理想に泉大津がなってほしい。

指導課長：今日参加する前に、学校図書館担当の課員と改めて話をし、課としても今年度の振り返りなどできたので、いい機会をいただいた。指導課が小・中学校の学校教育のこともたちに携わるといえることと言えば、今日参加してくれた生徒が本に対して前向きに捉えてくれているので、そのようなこともたちが少しでも増えていけばいいと感じた。

生涯学習課長：図書館は生涯学習課の所管にはなっているが、シビックプライドなど市全体に関わることだと考える。市と連携という大きな形で、図書館というだけではなく、市全体に関わっていくということは大事だと考えている。

都市づくり政策課長：いろいろな意見を聞いてとても参考になった。本に触れられる機会の中で公園を挙げていただいたが、なかなか市内の公園にまちライブラリーのような本のボックスを置くのは難しい。公園ではいたずらがとても多く、無人のところには置くことができないということで、シーパsparkに設置をしている。環境が大事ということなので、公園をきちんと整備・管理し、読書だけでなく人を育てるといった最終的な目的もあると思うので、公園でも活かしていくことができると考える。

資産活用課長：当課職員も学校のみならず、いろいろな施設の改修をしているが、子どもたちからエネルギーをもらっているのも、学校を改修するメンバーも楽しそうにしている。

教育政策課長：教育部長からの話にもあったが、私もシーブラの開館前まで図書館の整備担当をしていた。シーブラに対してすごく評価をいただく声はこれまでも聞いていたが、中

学生から声を聞くことがなかったのでジーンときたのもあったが、このメディアセンターも請負の方がシーブラを見に行き、それを参考に設計を変えた経緯もある。教育長からも紹介があったが、縦にソーニングした特別教室を地域開放し、地域交流ゾーンとして整備をしており、これから続いていく校舎もそれを前提にした設計をしていくという方針を打ち出しているの、地域の小・中学生がいろいろな人と関わるなかで育っていくのは大事だと今も言われている。その観点にメディアセンターも含めて引き続き継続していけるようにしていきたい。

嶋田委員：ここまでの進行の中で、説明や補足、感想などを館長からコメントをいただけないか

事務局：これまでもいろいろなこどもの読書活動推進計画に携わってきたが、大抵は教育委員会のある課だけ、図書館だけで完結している。今回、泉大津市役所のいろいろな課の方が二つ返事で名前を連ねていいと言ってくださったのは大きく、みんなで泉大津の子どもたちを見ている感覚を味わえて幸せだった。ありがとうございます。また別の話だが、Library of the Year のプレゼンテーションのときにも、どうやって他の課との繋がりをPRしようかと考えたときに動画を撮らせてほしいとお願いしたときも快諾いただいた、その泉大津市役所との心理的な近さで図書館の活動を続けられている。

谷合委員：Library of the Year は素晴らしいことである。泉大津市役所のサイトにももっと大きく書いて欲しい。「キミと、よみドキッ！」もまだ1年目なのでこれからしばらく様子を見ながら、またバージョンアップを図ってけたらと感じた。

高橋委員：小津中学校のメディアセンターを会場に使ってもらえて嬉しい。子どもたちも急に声を掛けても来てくれるのでありがたい。小津中学校は研究開発学校として国の指定を受けており、生徒の願いを叶える生徒を中心にしたカリキュラムマネジメントで、予測不能なこれからの社会を生きる力を育成する研究をしている。そんな中で、プレゼンや自分の気持ちを表現するなど、いろいろな社会へ関わっていきながらアウトプットしていく様々な活動をしている。参加してくれたのはその象徴的なこどもで、「中学生の主張 大阪府大会」の1500あった応募の中、1位と2位を小津中学校が取った。そんなこどもが育っているのは本当にありがたい。

澤谷委員：なかなか中学生と触れ合う機会もないので、泉大津市立図書館で前に子どもたちにあった時も感じたが、本当にちゃんと自分のことを言えるのがすごいと思っている。いろいろと暗いニュースも流れているが、まだまだ捨てたものではない。そして泉大津はまだまだいい街になるのだろうと、羨ましいと思いつつ見ている。

岡本委員：Library of the Year の後、図書館業界的に衝撃が走ったのは、泉大津市で館長他、図書館職員の公募であった。業界では震撼するニュースだった。これだけ成果を出してきたからこそ、働く人のサステナビリティを是非実現していただきたい。私は特に民間事業者の立場なので、私が言ったほうが説得力があると思うが、公共コンサルタントをやっている一番課題なのは人の体制である。箱を上手く作るだけであれば、正直言ってちゃんとやれば全然できる。しかし人的な仕組みをしっかりと作り込むことと、且つ人が異動や定年退職しても変わらないよう、いかに仕込めるかというのが全てになっている。これは作るのは時間が掛かるが、壊すのは正直 1 年でできてしまう。それはすごくまずい。館長と副館長が前任でいた自治体の図書館を見れば答えは明らかである。その街は私にとっても半分ふるさとだが衝撃である。あれほど凄かったものが、ものの数年でここまで落ちることができるのか。私の姪が住んでいるので非常に残念である。すごく本が好きで、小さい頃その図書館をとっても愛していたが、今は中学生になった彼女にとって恐らくもうその図書館は刺さっていない。つい先日帰省したときに目の当たりにしたが、一人一人の雇用待遇の問題というより、今日来てくれたような子どもたちに対する約束として 10 年 20 年変わらないものを提示しないと、一過性の花火みたいに見られたときが怖い。そうすると、あれだけ賢い子どもたちなので、我々大人の非常に稚拙な嘘を見抜いてしまう。そうではなく、そこに市としての信念を持って教育環境を作っていく、という踏み込んだ意思をそろそろ見せていいのではないか。ご本人たちがこの場にいらっしゃるが、気をつけないと他所の自治体に引き抜かれることになる。

阿児委員：「キミと、よみドキッ！」もそうだったが、みんなが読めるというのはすごく大事である。実際に今日参加した子どもたちが初めて目を通したとしても、何の話をしているのかが頭に入ったと思う。やはりそれが大事で、教育長が言われたように 6~7mm ある厚いものだと、自分たちが何しに来たのかわからないとなっていたと思う。いろいろと評価の方法はあると思うが、いい意味でゆとりがある。余裕がある。細かく書きすぎているかもしれないが、どう解釈していくかというのには幅があるのはすごくいい。また、ここに書かれていること、きちんと成果の判断手法を、この小津メディアセンターで行ったのが素晴らしい。シープラで実施する方法もあったが、そうではなくやはり生徒たちも来やすい学校図書館で、顔が見えるような形でできたのは泉大津として大きい成果であると考えている。何度も言っているように、泉大津市の規模は、いい大きさ、いい狭さ。地域の狭さをもっと活かしていく活動の一つとしてあると感じたので、2025 年度、2026 年度も非常に楽しみである。

嶋田委員：泉大津市教育委員会の皆様は有言実行を今回示してくださった。次年度も期待しています。

終了 19:45